

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2014年6月7日

文責：JUN

「やり方」を求めるか、「振り返り」を積み重ねるか？

1 やり方を知りたい教師の気持ち

「どうしたらこのような授業ができるのですか？」

「どうしたらこのような子どもが育つのですか？」

「どういうやり方をすれば『学び合う学び』ができますか？」

研究会の場で、訪問した学校で、何度となく受けた質問です。そのたびに、わたしは同じ答えを繰り返すこととなります。

「『学び合う学び』に定まったやり方はありません。子どもが豊かに学び合っていればそれが『学び合う学び』です。そもそもやり方が先にあるわけではないのです。理念はあります。その理念に照らして、目の前の子どもをみつめて、自分自身をみつめて、これがわたしの『学び合う学び』だという授業をつくり出し、学び合える子どもたちを育てていくしかないのです」

こんなわたしの言葉に、質問をした教師たちは一様に複雑な表情をされます。申し訳ないと思うのですが、そうとしか答えられないのです。

心に響く授業や子どものすがたを目にしたら、自分もそういう授業をしたい、こんな子どもたちにしたいと思う教師の気持ちはわかります。その授業に憧れを感じれば感じるほどその気持ちは強くなるでしょう。教師ならだれしも、今よりよい授業をしたい、生き生きと子どもが学ぶ学級にしたいと思っているのですから。しかも子どもへのかかわりは時間限定のものでしかありません。かつて当たり前のように行われていた「持ちあがり（同じ学級編成のまま二年以上同じ教師が担任をする）」は最近あまり行われなくなりました。それだけに、担任をする期間は短いものでしかなく、その期間内に少しでもよい結果を出したいという気持ちになり、やり方を求める性急さに走ってしまうのです。

しかし、その一方で、やり方を知ってそのやり方の通り実行すれば憧れた授業が生まれるかという決してそういうことにはならないということも教師たちは知っています。子どもを対象に子どもの心に沁み込む教育をするということはそんな簡単なものではないということを実感しているからです。教師の仕事にマニュアルはないのです。けれども、早く結果がほしいというのが偽らざる教師たちの気持ちです。だから、マニュアルはないとわかっている、何がしかの手がかりになる「やり方」があるのではないかと考えてしまうのです。

2 教師の専門性は振り返りという実践経験で

わたしの教師としての歩みは、間もなく50年になります。授業をする立場から退いてから25年、退職してから11年になりますから、今のわたしが教師と言えるかどうかとは思いますが、今もって学校訪問をし、学校づくり・授業づくりにかかわっていることを考えれば、自分は生涯教師なのです。

その50年の歩みからはっきり断言できることがあります。それは「教師の専門性は経験することでしか身につかない」ということです。もちろん、多くの本を読み、授業方法について研究し、研究会に出かけ、信頼する人、憧れの人から直接教を請う機会も積極的に得るようにしてきました。けれども、そうして学んだことがどれだけあったとしても、それだけでは、わたしの教師としての専門性は培われませんでした。わたしの教師としての専門性は「実践」という経験を積むことで少しずつ少しずつ実っていったのです。しかも、それはただやってみるだけの実践ではなく、そのときそのときの自分と子どもの状況に合わせて授業をし、そこで生まれた事実を「振り返る」という実践経験でした。それは、自分をみつめ、自分の行った事実をみつめ、そこから「その次」という今後に思いをはせるものでした。

わたしは、常々、授業をする前の研究よりも、授業後の研究にエネルギーを注ぐべきだと述べてきました。もちろん、授業実施前の研究がおざなりなものであってよいと言っているわけではありません。子どもに提示する題材・テキストに対しては、教師として自分の研究をしておく必要があります。けれども、教師としての自分を本当に育ててくれるのは、子どもとの授業経験です。豊かな学びの事実を生み出すのが教師の仕事だからです。どれだけ立派なことが語れても、重厚なプランを立てられても、子どもに何事も起こせなかったらそれは教師の専門性とは言えないでしょう。教師の専門性は子どもを対象とした実践のなかにあります。それを高めるのはその実践を仔細に振り返るという地道で持続的な行為でしかないのです。

「やり方」を知りたいという心も、自分と子どもの営みにじっくり向き合わないという点では、授業前の研究重視と共通する考え方です。しかし、子どもとの営みそのものを深くとらえるということは簡単なことではありません。何人もの、しかも刻々と移り変わる子どもの事実は途方もなく複雑だからです。知的であり、人間的であり、感覚的であり、情熱的でもあります。事前のプランとか、特定の方法に収まりきらない、まさに人間と人間がなさせることなのです。しかし教師ならその専門性をはぐくんでいかなければなりません。それには、子どもとのあいだで行った事実を丁寧に真摯に深く「振り返る」という行為を、何度も何度も行うしかないのです。まるで職人修行のように。

ただ、断っておきたいのは、まず「やり方」を求めたいという教師の気持ちをすべて否定するつもりはないということです。よいと思ったやり方を取り入れてもよいのです。ただ、心しておいてほしいのは、そのようにして取り入れやってみて、そうして生まれた事実を「振り返る」ことなしには、その「やり方」のよさは発揮されないだろうということです。人間のなかに生まれるものの価値は、すべて事実のなかに存在するからです。事実をみつめることのできる人しか優れた事実は生み出せないからです。

3 事実の「振り返り」をどう行うか

では、教師の専門性向上につながる「振り返り」はどうすればできるのでしょうか。

「振り返り」の第一の難しさは、自分で自分をみることができないという点にあります。人は他人のことは見えても、自分のことは見えにくい、いえ、自分のことほど見えないものはないと言われます。つまり、「振り返る」という行為は、その難しい自分自身の可視化をしなければできないということになります。

可視化する方法と言えばビデオ機器がすぐ浮かびます。教育の世界だけでなく、いまやあらゆる分野でビデオ映像が活用されています。教育の世界でも1980年代から使われるようになりました。稲垣忠彦先生が「授業のビデオカンファレンス」として授業研究の場で使われるようになったのがその先駆けでした。そして、今、「学びの共同体」を標榜する学校においては、ビデオ映像の活用は必須のものとなっています。

それは、その気になればすぐにでもできることです。ですから、据え置き撮影でもよいので日常的に実行するとよいでしょう。撮影すること自体はそれほど面倒なことではありませんから年に何度かならだれでもできることです。しかし、撮影した映像を有効に活用することができるか、自分自身の専門性向上につなげることができるかという点、それはそれほど簡単なことではないように思われます。映像をただ視聴するだけでは「振り返り」にならないからです。可視化できた後に横たわる難しさとはどういうものなのでしょうか。

「見れども見えず」ということばがあります。現象的には見えているのだけれど、肝心のことが本人には自覚されない、認識できない、つまり「みえない」という意味です。つまり、ビデオ映像は見ることができても、そこに映しだされた授業のどこにどういう事実があるのか、そしてそこに存在する教師の専門性とはどういうものかがみえないことが多いのです。そこにみえ方の壁が横たわっているのです。その壁を克服する手立てとはどういうものなのでしょうか。

同僚間でビデオカンファレンスを行う

すぐにでもできる継続可能な方法は、同僚に授業を見てもらうことです。教師にとってもっとも身近な職業上の他者は同僚です。しかも、その同僚は、同じ学校で協働する人たちであり、自分が対象としている子どもについても、学校規模による違いはありますがある程度は知ってもらっている人たちです。その同僚に授業を見てもらうのです。

学校内で授業を見せ合うという研修活動は、広く全国的に行われていることですから、わたしがここで述べていることは取り立てて特異なことではありません。ただ、その際、ビデオ撮影をしておいて、授業後、その映像を再生しながら協議することは少ないのではないのでしょうか。授業をした本人は、同僚から様々なことを言われてもピンとこないことがあります。それは、自分の事実を見ていないからです。ビデオ映像はその時の状況を映し出します。こうして授業者は自らの事実に出会うことができます。同僚から指摘された事実とはどういうものであったか、そこにどういう意味があるのか、どういう課題が存在するのか明らかになります。そこにビデオカンファレンスの有効さがあります。

信頼する人からコメントをもらう

もっと深い学びをしたいと思ったら、あの人から学びたいと信頼できる人、尊敬できる人からコメントをもらうことです。もちろんそういう人においそれと声はかけられないかもしれませんが、しかし、こういうことにかけては厚かましくてよいのです。チャンスは自分でつかむものです。直接、その人に申し出るといこともよいのですが、その人のコメントがもらえる研究会で発表する機会を得るという方法もあります。とにかくその機会を見つけることです。

ただ、その際はっきりしておいてほしいことがあります。その一つは、相手の方への礼儀を失しないようにするという事です。自分の思いだけで突っ走ってはなりません。しかし、熱意は感じてもらわなければなりません。その匙加減を忘れないように謙虚に、それでいて心を込めて依頼することです。そして、もう一つ、どんなコメントが返ってきても受けとめる覚悟をしておくことです。一つとして褒めてもらえないかもしれないけれど、それが自分の現実だとしたらそれを甘受しよう、そしてそこから自分を磨いていこう、そう考えておくことです。それは実践する者としてのさわやかな覚悟です。自分を磨く場は、自分で見つけるしかありません。わたしたちの成長は、どれだけ積極的に行動し、どれだけさわやかな恥をかくことができるかにかかっているのです。

振り返りを文章化する

同僚や信頼、尊敬できる人から学んだ後、さらに実行するとよいことがあります。それは、その「振り返り」の事実を文章化するという事です。

書くことは考えることです。文章にしようとなると、それはどういうことだったのか、授業のどういう事実でどういう大切なことがあったのか、そして、それは自分の専門性のどういうことにつながっているのか、そういった一つひとつについて考えなければなりません。しかもある程度脈絡のあるとらえ方をしないと文章になりません。それは、わかっていたかと思っていたことが曖昧であったとか、授業のときはおろか協議していた時にも気づかなかったことであったとか、そういう発見をもたらすことになります。

「振り返る」という行為は、自分自身の事実と深く出会うために行うものです。その出会いを深め、自分にとって有効なものにするために「書く」という活動は大きな力を有しているのです。

自分の事実に出合わない人に進歩はありません。自分の事実に出会うことを恐れる人、避けたがる人に進歩はありません。わたしは、まだまだ納得いく授業ができないでいたとしても、自分の事実と謙虚に向き合おうとしている人を信頼します。文章化は事実への出会いを促進し教師としての自分を成長させてくれる大切な行為なのです。

7月に行う「第16回 授業づくり・学校づくりセミナー」の二日目の午後、この「振り返り」についての報告とそれをめぐるディスカッションを行います。そのとき、ここに書いたことがさらに実感をもって浮かび上がるでしょう。